

新島賞『子どもを誰一人取り残さないために』 檜垣 恵麻

当コンテストの開催を知った時、世界は見えないものに翻弄され、私は生きる希望を見失い、何をやるにもやる気が出ない日々が続いていた。しかし、当コンテストに応募する意欲のみは何故かあった。新島襄の生涯を調べていくうちに、自分の中で熱い思いが湧き上がってくるのを感じた。その思いを、将来困難に直面した際に見返せるよう、ここに記そうと思う。

新島襄は日本の近代化を先導しようと、国禁を犯してまで渡米した。彼を縛るものは何もなかった。法律も世間の目も決して彼の行動を止めなかった。帰国後、近代化のリーダーとなる人物の育成に尽力し、生徒一人ひとりの人格を尊重した。

一方、私の志は子どもを誰一人取り残さない社会を創ることである。昨年からボランティアとして働いている塾での経験がきっかけだ。その塾は経済的・家庭的事情により通常の学習塾に通うことのできない小中学生を対象としている。そこで出会った子どもたちは、親が不在のため満足に食事が取れなかったり、勉強したくても勉強する機会を与えられていなかったりなど、社会で居場所を失っていた。識字率も高く子どもの貧困があまり問題にならない日本で、社会から取り残されている子どもたちが大勢いるということは、何不自由なく過ごしてきた私には衝撃であった。いかに自分が社会について無知であったかを悟るとともに、これ以上人知れず寂しい思いをする子どもたちがいないように私も貢献したいと強く思った。

新島襄の熱い思いには私も心が動かされた。彼の生涯について書かれたものを読み、私も彼のようになりたいと思った。子どもたちの居場所作りに励み、子ども一人ひとりと心から向き合いたいという自分の思いに気付いた。キリスト教が人間の育成に重要と考えた新島に対し、私は同じ食卓を囲む時間を大切にしたい。子ども食堂は既に存在しているが、まだまだない地域もある。私はそれを日本の隅々まで展開したい。子どもたちが気軽に放課後に立ち寄れる食堂で、少しでも彼らの寂しさを紛らわしたい。大きなテーブルを皆で囲んで、笑顔の絶えない空間を作りたい。そして、子どもを誰一人取り残さない社会の実現に一步ずつ近付いていきたい。子ども一人ひとりと向き合うことで、彼らからたくさん吸収し自分も人間として成長していきたい。

自分の志を掲げていく中で、今後他人から非難されることが必ずあるだろう。今までの私だったらすぐに折れていたかもしれない。しかし、新島襄の熱い志、生き方に触れた今、私に怖いものなどない。たとえどんなに非難されようが、同じ志を持って集まった仲間を信じ、自分の原点を思い返し、ただ前に進んでいくだけだ。これ以上多くの子どもたちが社会から取り残され寂しい思いをしないように、今ある社会を少しでも良い方向に持っていくために、自分の人生を捧げていく。

新島襄の熱意に触発される形で、自分の中で漠然とあった志をこうして初めて文字に記した。今の私は、少し前の生きる希望を見失っていた面影はなく、希望に満ち溢れた目をしている。今抱いてる思いを胸に、これからも前に進んでいきたい。